

ぼくらの網引湿原

田中朝陽・亀田友弥・福本愛奏音・穂積芳季（県立小野高等学校生物部）

はじめに

網引湿原（図1）は加西市網引町にある湿原で、大小6つの湿原を合わせた総面積は県下最大級の規模になる。この湿原は周辺の山林（主にスギ、ヒノキの植林）への降水が流れ込んでできる湧水湿原で、有機質が少ないシルトなどからなる貧栄養土壌であるため、このような環境に耐えうる湧水湿原に特有の植生（トキソウ、カキラン、サギソウ、トウカイコモウセンゴケなど）が見られる。また、全国的にも少ないヒメヒカゲ、ハッチョウトンボ（図2）、ヒメタイコウチなどの昆虫がみられる。「持ち出さない、持ち込まない、踏み込まない」のルールを掲げ、地元のあびき湿原保存会が中心になってこの貴重な湿原の生態系を守っており、多くの花が咲く初夏には多数の見学者が訪れる。また、加西市より野生生物保護地区の指定を受けている。



図1 網引湿原



図2 ハッチョウトンボ

なぜ保全しなければならないのか

現在、世界の各地で種の存続が危惧される生物、いわゆる『絶滅危惧種』が増加している。その中には土地開発などによって住処を奪われた生物もいる。ここ網引湿原には、そんな絶滅危惧種が数多く存在している。このままでは種を絶やしてしまう動物を守ることが、高度な文明を持つ我々に課された使命だといえるのではないかと考える。また、湿原は私たちの生活にも深くかかわっている。網引湿原には大きな池があり、その水を集落近くにある田畑での農業に利用しており、湿原は必要不可欠な存在といえる。しかし、その湿原は、本来、植生の遷移によって次第に乾燥化が進み、やがては低木林を経て森林へと移り変わっていく可能性が高い。これは自然現象であり放置すると止めることはできない。昔は薪炭林として、あるいは牧草をとるための茅場として絶えず人の手が湿原に入っていた。このため、湿原の遷移は現状に留まることができていた。しかし、そのような湿原の存在意義がなくなった現代では、植生自体に価値を認め、保全を目的として人の手による植生への介入が重要になっている。1900年以來、世界の湿地の64%が消失してしまったことがわかっている。このまま湿原が消えてしまうことは、私たちの生活を豊かにする点において、深い打撃を与えるだろう。今、湿原の自然を守ることは、私たちと自然をつなぎとめる絆を守ることだと考えている。

網引湿原のために、私たちができること

もともと全く手付かずの状態だった網引湿原を守るため、平成25年11月から保全活動がスタートし、27年1月にはあびき湿原保存会が立ち上がり、湿原への山道や散策用の小道の整備などをボランティア活動で取り組んでおられる。一方、少子高齢化の影響で保全のための担い手が不足しており、より多くの方の協力が必要となっている。そのために私たちができる提案として、たとえば、食事会を催し、保全活動を終えた後に地元の特産品を使った料理を食べ、農作物と湿原の繋がりを考えたり、県内の他の湿原の保全に携わる複数の団体と連携し、湿原の保全に対する兵庫県民の関心や理解や促すといった啓蒙活動が実現すればいいなと感じている。